

名古屋女子大学

4号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

近況と研究所活動への期待

総合科学研究所長 河村 瑞江

日ごろ総合科学研究所の事業にご支援ご協力をいただいておりますことを感謝申し上げます。18年度に実施した研究所の新たな二つの企画を含め、今後の動向をお伝えしたいと思います。

新たな企画の一つは、研究所として念願であった『総合科学研究』創刊号の発行です。17、18年度にわたって検討を重ね運営委員会の皆様の協力を得てこのような運びになりました。運営委員の中から編集委員を選出し林和利先生に編集委員長を引き受けていただきました。『総合科学研究』の内容は、機関研究、プロジェクト研究の研究論文と事業報告の構成となります。皆様のお手元にお届けできるのは4月下旬を予定しています。なお、『総合科学研究』の発行にあたりISSN(国際標準逐次刊行物)に登録済みであることを申し添えておきます。

二つ目は、試みとして実施しました地域貢献事業です。春光会「キャリアネットワーク」の活動に研究所が協賛して作品展とバザー、汐路学舎で二つの講習会をいたしました。ものづくりを通じて地域の方々との触れ合いができたことは、今後の貢献事業について考える扉を

開くことにつながったといえます。

18年度の機関研究では「創立者越原春子および女子教育の研究」、「初年次教育の研究」等、時代が求めている教育問題に関する研究活動が主になっています。中学研究会は「生徒のための学校づくり」を目指し、『良い授業』とは何かを明らかにする研究授業後の目標に向かって先生方が熱心に取り組まれており、研究会では専門分野の大学教員からの助言や意見交換でお互い刺激を受けながら順調に成果が上がってきています。このような活動を行っている中で、高等学校との連携を望む声が上がっており、19年度からは、新たに高等学校との研究会も発足することになりました。学園としても中高大一貫教育を目指した教育に力を入れようとしておりますので、中学研究会同様、高等学校研究会も実践的に生かされる内容で充実した活動となることを期待しています。

なお、研究所の事業として長年にわたって行ってまいりました心理相談室は、18年度をもって閉じることになりました。心理カウンセラーの先生方、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

最後になりましたが、所員の皆様の温かいご支援ご協力をいただきましたことを深謝いたします。今後ともこれまで同様、名古屋女子大学総合科学研究所への積極的なご協力をお願いいたします。

「開かれた地域貢献事業」名古屋女子大学同窓会キャリアネットワーク(もえぎ塾)主催

研究所では、今回、試みとして「開かれた地域貢献事業」を企画しました。名古屋女子大学春光会の会員が資格や特技を生かして社会貢献をすることを目的としているキャリアネットワークの「もえぎ塾」(代表:柴村 恵子)に、総合科学研究所が協賛し、地域密着型事業を行いました。地域文化の発展とコミュニケーションを図ることを目的として、瑞穂通三丁目市場のブースにおいて、展示、バザー、また、本学の汐路学舎において講習会を行いました。その様子を紹介します。

第1回

日時:11月13日(月)～11月18日(土)

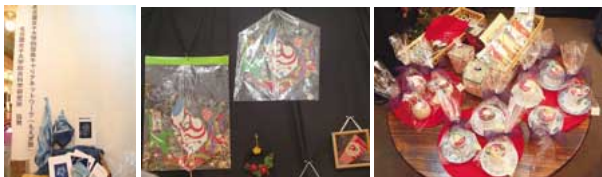
内容:卒業生の手作り作品展と手作り小物バザー



第2回

日時:12月4日(月)～12月9日(土)

内容:クリスマス飾りと正月飾り



第2回展示の時には、クリスマス飾り用のミニアレンジの盛り花を立ち寄って下さった希望者の方に講習会をして持ち帰っていただきました。作りながらお話しができ、地域の方といろいろコミュニケーションがとれてよかったと思います。およそ60名の参加で大変好評でした。

講習会

藍染体験 午前10:30～12:00
午後13:30～15:00

講師:河村瑞江教授

参加者:午前4名、午後11名 計15名

場所:名古屋女子大学西館401教室(デザイン実習室)

スカーフ、バンダナ、ハンカチなど絞り染めやぼかし染めを体験しながら、コミュニケーションを図ることができました。

オリジナル正月飾り 午後13:30～15:00

講師:加藤美津子(短大生活芸術コース卒業生)

参加者:8名

場所:名古屋女子大学
南1号館204教室

講習会では個々の希望にあわせてご指導して戴いたので、一人ひとりの希望に合った作品が仕上がっており、参加者の方々には大変喜んでいただけました。



(文責:横田 香織里)

機関研究報告

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

◎堀出 稔・伊藤太郎・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子・丸山竜平・村上哲生・吉村智恵子・依岡道子

平成17年、18年と2か年継続した本研究も期間を終了する年度末を迎えた。早いもので2か年が瞬間に過ぎ去り、それぞれ異なった視点から研究が深められ現在に至っている。現在はこの成果を論文として発表するための準備に取りかかっている段階である。

この2か年の研究活動を総括すると次のようになる。平成17年4月から7月にかけては八つの研究領域を主テーマと結びつけるため、「建学の精神と教育理念」を副テーマとしたこと、そして創立者と学園の歴史について研究者全員が理解を共有するため、学園史『春嵐』を読み、語り合った。9月には総合科学研究所の協力のもと、「創立者越原春子先生を偲ぶ集い」を開催することができた。その集いには昭和12年から昭和34年の卒業生8名が参加され、創立者のことや当時の学校生活の思い出を語って頂き、研究員にとって貴重な研究資料となった。10月から翌年の3月にかけては研究員が自らの研究を深め、年度末の研究発表会を3月に開催した。さらに、それと並行して「創立者を偲ぶ集い」の卒業生の話を書き録したテープを文章化し、小冊子の発刊に向けて準備を進めた。

平成18年度は研究員がそれぞれ研究を深め、月例研究会を開き、中間発表して行くこととなった。月例発表会は5月の「明治、大正期の女性運動の動向と創立者への影響」から始まり、平成19年2月には「大正期の新聞・雑誌に見られる女性の職業教育について」が発表され、今年分はすべて終了した。

また、18年度にも「創立者の思い出を語る集い」を実施し、酒井清子元名古屋女子大学教授をお招きした。残念ながら昨年暮れ先生は御逝去されましたが、10月の集いではお元気に生き生きと創立者の生前の御様子を語られ、研究員全員が多いに感動して質疑応答が続き、会議の定刻をはるかに越えてしまった次第です。

最後に、平成19年度の本研究の研究員および研究内容について紹介します。研究員および研究テーマ募集の結果、6名の応募があり、個人研究4、共同研究1で新たに19年度を出発することとなりました。新規構成員は、伊藤太郎、木原貴子、遠山佳治、羽澄直子、堀出 稔、依岡道子です。研究内容はほぼ過去2か年の継続となります。本研究が学園の将来と女子教育に貢献できることを祈りつつ、新年度の研究に向かう所存です。（文責：堀出 稔）

機関研究報告

「大学における効果的な授業法の研究 4」

～初年次教育についての授業法の開発～

◎遠山佳治・伊藤太郎・宇野民幸・白井靖敏・竹尾利夫・谷口富士夫・原田妙子・幸順子

本研究は、平成13年度から進められています総合科学研究所機関研究の授業改善プロジェクトへの支援の一環に位置し、平成16～18年度の機関研究「大学における効果的な授業法3 教養教育についての授業法の開発」の中で審議されました初年次教育の必要性から、本研究へ引き継がれたという経過があります。

現在、大学への全入時代を迎え、学力の二極化傾向・基礎学力低下傾向が進んでいるといわれる状態におきまして、全国の大学では、初年次教育（一年次教育）のさまざまな取り組みが始まっています。本学におきましても、新たな初年次教育の見直しを迫られているのが現状であり、9月20日には、名古屋大学高等教育センターの中井俊樹先生を招き、「授業改善と初年次教育の課題」と題して、研究所の講演会を開催しました。

本研究は、各大学の初年次教育の事例を調査検討した上で、

本学の理想的な初年次教育のあり方を提案し、本学用テキストを作成するという実践的研究です。

例えば名古屋大学では、今年度より『名古屋大学新入生のためのスタディティップス①ー「学識ある市民」をめざして』『同②ー自発的に学ぼう』という小冊子2冊を作成し、入学式に全新生へ配付しています。

また玉川大学の初年次教育は、高校から大学への転換教育と捉え、1クラス30名程度受講の必須科目として実施しています。学習・生活上のスキルを中心に、独自のテキストを作成しています。

本学では、各学部学科における違いを考慮して、さまざまなページ構成が可能なバインダー方式のテキストを想定しています。そして、どのような初年次教育の内容を展開していくべきか、現在検討を進めています。（文責：遠山 佳治）

機関研究報告

「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな感性や表現力を育むための実践～

◎幼児保育研究グループ

18年度まで3年間研究テーマを継続しながら、感性や表現力を育むことに関連の深い造形あそびとリズムあそびを中心に実践研究を進めてきました。これまでの研究から、感性や表現力を育む実践においては、個々の幼児の育ち及び仲間集団やクラスの中に見られる関係を基本として環境構成することの重要性を再

認識することができました。

19年度は、これまでの活動を通して、3歳児から5歳児までの個々の幼児の育ちがどのように促されてきたのかを再度確認しながら、まとめとしての実践研究に取り組み、より望ましい教育活動のあり方を検討していきたいと考えています。（文責：森岡とき子）

機関研究報告

「中学生の学力向上に関する研究」

◎中学校学力向上研究グループ

第131回研究会(10/31)

- 研究テーマ「実感をともなう学習を目指した授業づくり」
- 公開授業 「社会:私たちの生活と経済」
中等部 岡田 有希子 教諭

◎第131回出席者:中学校高等学校教諭・遠山佳治・平松道夫・
宮原 悟・河村瑞江・横田香織里

公民の授業では、学んだことと自分の生活や将来を結びつけながら理解し、社会について考えていこうとする態度を生徒に身につけさせたいと考えています。しかし、複雑なしくみや聞きなれない言葉を学ぶため、なかなか難しいこともあります。そのため、授業では、自分の生活に関わる具体例や活動を通して学ぶことで、学習の対象への現実感を強めます。そして、本当に納得するという実感をともないながら学習をし、自分と社会とを結びつけて考えられるようにすることを心がけています。

今回の研究授業では、身近な飲食店である「ハンバーガーショップ」を取り上げ、シミュレーションを行いました。その中で、生徒は、これまでの消費者としての視点を広げ、経営者という客観的な視点から考えてみる、という体験をしました。公開授業後の研究会では、授業の教材や流れについて話し合い、実感を大切にするためのアドバイスを頂きました。大学の先生方からは、教授法や社会科、経済教育等の立場から専門的・包括的なお話を聞くことができ、いくつかの課題を解決するための方向性を得ることができました。
(文責:岡田 有希子)



第132回研究会(11/29)

- 研究テーマ「『数学的な考え方』を育む授業づくり」
- 公開授業 「数学:平行四辺形になるための条件」
中等部 小林 雄介 教諭

◎第132回出席者:中学校高等学校教諭・学園長 越原一郎・宇野民幸・
木原貴子・鈴木公司・河村瑞江・渋谷 寿・横田香織里

小学校算数から中学校1年までの生徒の主な学習活動は、「計算して答えを出す」「図をかく」「グラフをかく」などが挙げられます。これらの活動は、どちらかといえば手続きの習得を目的としています。

それに対して、中学2年生になると「証明」が出てきます。説明することが目的となり、生徒にとっては不慣れな内容ですから、ここでつまづく生徒は多いと思われる。しかし、「証明」の内容は、説明する力を身につけるとともに、数学的な内容の文章を解釈する力も身につけるよい機会を与えてくれます。テキストの答えを見て、模範解答の解説を解釈することができれば、自学自習のスタイルを確立することができ、高校生になってから、大きな力となると考えています。そのため、教科書で実際に証明を取り扱う前から、説明する活動を取り入れて授業を行っています。数学的に考え、数学的な文章をしっかり読みとれる力を育むために、生徒たちが、説明することの必要性を実感し、少しずつ自分の言葉でつくっていく学習を展開しています。

なお、グループの研究テーマ「よい授業を目指して」の一環として、今回の研究会から、本グループでは「研究授業のあり方について」の提案をさせていただきます。授業研究そのもののあり方を考察の対象とする必要があると考え、さまざまな取り組みを始めております。
(文責:小林 雄介)



平成19年度プロジェクト研究

平成17年度より始まった「総合科学研究所 プロジェクト研究」。自然科学・人文科学等の専門分野の枠にとらわれず、理論研究または実践活動の振興を目的として、学際的かつ複数の研究者による共同研究です。平成19年度の研究の募集を平成18年11月27日～12月8日の期間行いました。選考の結果、次の研究が次年度スタートします。

ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援

～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～

◎白井靖敏・山口厚子

18年度に行ったプロジェクト研究(その1)では、日本とシンガポールの高校生の国際交流を、本学の教員主導で各校の先生方と協力して実践した。日本の生徒の70%以上は、このプロジェクトおよび主要な内容である「食生活」への関心を示し、家庭科、特に食をテーマにした国際交流の重要性と発展可能性が示された。

一方、国際交流におけるICTを用いたメーリングリスト、テレビ会議、ホームページ作成の効果を正しい尺度で検証することなどの新たな課題解決のため、本研究(その2)では、授業で取り扱う内容や手法の開発、さらに、交流の場となる目的別の教育実践的なプラットフォーム(LMS)、特にコミュニケーションシステムの基礎研究を進める。このことを通じて、本研究は、本学の家庭科教員養成カリキュラム発展に寄与するものと確信している。

機関研究

「中高大一貫教育を目指した高等学校カリキュラムの研究」

◎高等学校研究グループ

いよいよ中学・高校と大学の法人合併が実現します。私たちが女子教育の総合学園として10か年一貫教育を進めていくにあたり、中学校と大学を結ぶ高等学校はたいへん重要な位置を占め、その教育内容の充実がよりいっそう求められるところです。

平成17年度より高等学校で実施している「NEW名女」カリキュラムは、特別進学、高大一貫、国際言語という3つの類型を持つコース制カリキュラムです。大学との連携教育を推進することによって、高大一貫コースはもちろんのこと、特別進学、国際言語の両コースにおいても教育内容の充実・改善が進んでいくことでしょう。特に、大学での学習・研究内容に堪えられるだけの基礎力を高等学校段階でどうつけるか、また、高校生の現状を踏まえて大学ではどんな授業を展開すべきかなど、高校と大学が連携して研究を行うことで双方の課題が解消していくような成果を求めていきたいと考えています。

また、高等学校には本校中学校より進学してくる生徒のコース(高

等部)があり、平成20年度より外部生と同様、3つのコース制カリキュラムに変更していきます。中等部では現在、高等学校の学習内容の先取りカリキュラムや、中高一貫性を高める総合学習カリキュラムの研究などに取り組んでいます。それを高等学校段階に継続していくことにより、新たな方向性や問題解決の糸口を探っていきたいと考えています。また、中高大10か年一貫教育ならではの愛校心を涵養し、本校の生え抜きとして学園訓「親切」を体現できる学生・生徒の育成も必要となります。

最近是一段落したとはいえ6年一貫の「中等教育学校」ブームや、各地で様々に行なわれている「高大連携事業」ですが、そのふたつをひとつの学園内で並列して行い、学力育成面でも人間教育面でも一本筋を通していくことができれば、本学園に対する社会からの信頼もいっそう厚くなると思われれます。その基礎的な研究機関として、本研究を位置づけていきたいと考えています。

(文責:大西裕人)

第24回中学校研究発表会・教育講演会

第24回中学校研究発表会(2/26)

「本校が求める『よい授業』の本質を目指して」

公開授業

「道徳:思いやり」 中等部 福田 誠 教諭
「本校の道徳教育におけるシラバスの研究
―校訓「親切」を具現化する手だてとしての道徳のあり方を求めて―」

研究発表会

●今年度の研究について 澤村 信次郎 教諭
●「本校の道徳教育におけるシラバスの研究
―校訓「親切」を具現化する手だてとしての道徳のあり方を求めて―」 福田 誠 教諭

◎出席者:中学校高等学校教諭・榎本雅穂・川田博美・木原貴子・白井靖敏・鈴木公司・谷口富士夫・遠山佳治・山口厚子・河村瑞江・渋谷寿・横田香織里



教育講演会(2/26)

「豊かさと活力を育てる心の教育」

～これからの学校教育の動向も含めて～

講師：永田 繁雄氏

文部科学省初等中等教育局教育課程 教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官(兼務)

主な著書:

「魔法の教室」(WAVE出版) 著
「総合的学習の展開・社会体験学習の展開と支援の方法」(明治図書) 編著
「生命尊重の心をはぐくむ」(東洋館出版社) 共編著

◎参加者:62名(中高教員49名、大学教職員13名)



心理教育相談室を振り返って

非常勤カウンセラー 瀬井 まりや

開設から34年経てきた、心理教育相談室がこの3月をもってその幕を閉じることになりました。そこで心理教育相談室のこれまでの歴史・役割をまとめてみたいと思います。

昭和47年に名古屋女子大学に児童研究所が開設され、当時の心理学担当教員が育児相談を中心にその任にあたっておられました。昭和54年に教育研究所と改称され、心理相談機関として東海地区では草分け的存在で活動が始まりました。昭和56年には現在の太白学舎に移転し、昭和60年には心理教育相談室と改名され、弘中正美先生・田畑洋子先生を中心として非常勤スタッフ4名、研究員、ゼミ生と大人数で相談室を支え、幼児・児童から青年期・成人までの幅広い年齢層のクライアントを多数受け入れていました。平成3年には生活科学研究所と統合され、現在の総合科学研究所、心理教育相談室となりました。

当時、東海地区でこれだけの遊戯療法・箱庭療法ができる施設は少なく、研究機関としても研究会の実施や他大学からの研究生の受け入れと周囲の要望に応えながらその役割を広げていきました。また相談室新設に向けて他大学から見学に来られる

関係者もおられました。当時のスタッフは現在では大学教員、公的治療機関勤務、開業などさらなる臨床の場を広げて活躍されておられます。相談室は地域社会へのサービスとして隣接区域だけでなく、遠方からの来談も多く、公的機関の枠にはおさまらないケースや発達障害・自閉症などの長期的支援の必要とされるケースの重要な受け皿となって現在に至っています。

こうした歴史・役割のある心理教育相談室が閉鎖されることは誠に残念ではありますが、時代の一役を成し遂げ、次世代の発展の礎になっていくのでしょうか。名古屋女子大学という大きな傘のもと、信頼できるスタッフに支えられ、これまでクライアントに安心した時間・空間を提供できたことに感謝したいと思います。そして相談室とスタッフをここまで率いてくれたのは他ならないクライアントの方々です。大学とスタッフそしてクライアントとともに育った心理教育相談室であったと感じています。

今後の総合科学研究所のさらなる発展を心よりお祈りいたします。最後になりましたがこのような機会を与えていただきました河村瑞江所長に感謝します。

編集後記

平成18年度は、総合科学研究所にとりまして変化の大きな年でした。長年、大きな地域貢献をなしてきました心理相談業務が終了しました。新たに研究所としての地域貢献事業1件を試行しました。また、研究論文と研究所年報の内容を持つ『総合科学研究』の創刊を決めました。このように、総合科学研究所では、所員の皆様のご協力のおかげを持ちまして、時代に適応した事業・企画を行い、成果を上げてまいりました。ここに、総合科学研究所だより第4号をお届けします。これらの成果と共に、継続中の機関研究内容、研究所関連事業内容等をご理解いただければと思います。ご執筆いただきました先生方には深く感謝申し上げます。今後とも、総合科学研究所の事業、総合科学研究所だよりの編集にご協力をお願いいたします。

総合科学研究所